

「藝術」の誕生

あいだのすみっこ 不定期漫遊連載(予定)第1回

「芸術」とは何か。あるいは常識的に「芸術」とはどんなものと考えられているのだろうか。なにがしかの「才能」を持った「創作者」が、多かれ少なかれその「独創性」を発揮して作り上げ、社会から「作品」としての評価を獲得したものの作る総体、といったことだろうか。そして「芸術家」は社会階層としても、たんなる「技術者」や「職人」とは別格との自己認識あるいは社会的矜持を持った存在であるようだ。今日なお常識として通用しているこの「芸術」や「芸術家」なるものは、しかし、いったいいつごろ、どこで、いかにして成立したのだろうか。小田部胤久『芸術の逆説—近代美学の成立』はそれを、18世紀の欧州における思想の展開のなかに読み解こうとする著作である—とこんな具合に説明すれば、またぞろ美術の現場とは無関係な、学者先生のご酔狂、という反応がかえってくるかも知れない。だが本書は、下手な推理小説など顔負けの、読むほどにスリリングな本。そしてまた、およそ今後の美術の行方を問おうとする読者には、とてもアクチュアルな本だ。ここまで高度な著作が日本語で読めるのだから、こんなありがたいことはない。「芸術家」や「芸術」愛好家として自分の立っている土台を問い直したい向きには、是非とも通読を、と願わずにはいられない。以下はその序章より。

「美術」という統括的上位概念—要するに枠組み—が明治日本に移入され、それに沿って殖産興業あるいは明治の輸出美術工芸が展開した経緯は、すでに北澤憲昭の『眼の神殿』(1989)が先駆的に明らかにした。この流れは制度史研究、あるいは美術を取り巻く社会学的研究という潮流に先鞭を付けた。それに対して本書は、そうした社会的条件は除外して、「芸術」なる枠組みが確立されるにあたっての、もっぱら理論的な条件を考察する。とかく美術史学という歴史学的手法と、美学という哲学的な方法とは、水と油のように反発しかねない。だが本来、その両者を重ね合わせに見て初めて、物事の輪郭も浮かび上がってくるはずだ。

そもその語源から言えば—学者の御託とはいわずに、しばらくのご辛抱を—、ギリシア語に起源をもつテクネーの、ラテン語での対応物がアルスだった。つまり今日では技術と芸術と呼び習わされているものに、かつては確固たる区別はなかった。技術一般をも意味した art のなかに機械的技術 arts m*chanique と美術 beaux-arts との区別を初めて持ち込んだ書物は、バトウーの『唯一の原理に還元された諸芸術』(1747)とされ、ドイツ語ではその直訳 sch*ne K*nste が定着して、今日言う諸美術となる。英語の fine arts にも同様の背景が想定できよう。だがここで、すぐにひとつの疑問が生まれる。従来スコラ以来の自由七科の伝統を引き継ぐ、自由学芸 liberal arts に対する mechanical arts という二分法は、この時期「美術」に当たる概念の成立とともに、再編を被ったのではないか?それはいかにして?

ここで問題となるのが、習熟態、持ち前などと訳される、ハビトウス habitus ではないか、と著者は問う。ギリシア語の hexis に対応する語彙で、所有を意味する動詞だが、ここでは

文法的に「状態」を指す。「詩を生み出す habitus は詩作術 poesis である、というバウムガルテンの用例(1735)も、アリストテレス以来の「技術」観に裏打ちされている。この「古典的」といってよい技術観の否定を通じて成立するのが「近代的」芸術観—とそう見るのが、著者の基本的な姿勢となる。あるいは詩作術をもはや habitus に属する「技術」ではなく、それとは異質の「芸術」と捉える見方が、「近代的」芸術観なのだ、というべきか。著者は、この「否定」の契機として、ダランベールの『百科全書』序文(1751)を解釈する。ここでは自由学芸を含む技術が、人から人へと伝達することのできる「確固とした不動の規則」 *regle* に拠るのに対して、芸術は一種の「発見」 *invention* であり、その法則 *lois* は天分 *genie* の司るもの、と解釈される。かくして詩作は、もはや習熟つまり habitus の所有によってなしうる技術では統御できない部分を含む、という逸脱性を付与される。その逸脱性に積極的に意義を与えることが、創造の主体としての芸術家という、今日に至る「常識」の契機となる訳だ。

今日なお「われわれ」が素朴に前提としている「芸術」観は、「芸術家」にせよ、「独創性」にせよ、自律した「作品」にせよ、いずれも十八世紀後半からの知の地殻変動によってはじめて浮上したものではなかったか。それらはたかだかここ二世紀半ほどの歴史しかもっていないのだ。こう言えば、直ちに次のような反論が来るだろう。冗談もいいかげんにして欲しい。芸術家に個人としての天才が認められ、そうした天才による創作活動が成立したのはイタリア・ルネサンスにおいてである、というのは常識だ、と。だが今日なお支配的な、そうしたルネサンスに関する常識そのものも、実は十八世紀末にようやく成立する新たな知的パラダイム—「近代的な芸術観」—の成立期以降に、そうした「近代的」視点を過去に投影した結果生まれた、とんでもない誤解だった恐れも、否定できなくなる。そしてこれは最近のウォーヴァーグ学派の何人かのイタリア美術史研究者(例えばチャールズ・ホープ)から指摘され始めた事態にも対応する。先にも触れた「発見」にあたる *inventio*、*inventione* という言葉は、ルネサンス期の画法書にあっては、画面の構図配置を意味するのみで、けっして画家=画工個人の「天才」による創作などを意味していなかった、との説も唱えられ始めたからだ。

本書はそこまでの推論にはなお慎重だ。だが少なくとも十八世紀にあっても、「創造」とは質量因とは無関係に、無から *ex nihilo* から何物かを制作することであり(これはトマス・アキナスの定義だ)、それは定義からして創造主たる神にのみ可能な技の謂であった。また独創性と訳される言葉 *originality* にしても、これは語源からして、根源、源泉を意味する *origo*(オリゴ酸の *origo* だ)から派生した形容詞の名詞化で、これまた事物の起源たる神が *original* であるのに対して、そこから派生 *derive* したものが、我々人類を含む被造物、という規定と骨がらみだ。こうした神に属する権能を冒瀆的にも人間の側に篡奪したところに、はじめて「芸術家」なる存在が、思想的に想定しうることは、もはや明らかだろう。詩人や画家に神に続く「第二の創造者」たる地位を与えるため、狂おしいまでの思索の秘術が巡らされる。それはいかなるものだったのか。その実態をより詳細に観察するのが、続く課題となる。

小田部胤久 『芸術の逆説—近代美学の成立』 東京大学出版会 2001年11月20日刊

* 編集部への注

横文字の外字が、シャープ書院からテキストファイルへの変換で消滅しています。
arts m*echanique の * は e には右上がりのアクセント
r*gle の * は e に右下がりのアクセント
sch*ne K*unste 最初の * は o にウムラウト 次の * は u にウムラウトです。
目下、年度末予算執行の接客業務で日夜なく、出来の悪い第一回ですみません。

以下第二回草稿

いまだにその内部に存在するところの、「近代的」芸術観そのものが、の核をなす考え方だ。「芸術家」とは「芸術作品」を「創造」する主体であり、そこでは「独創性」が積極的な価値を持ち、作品は作品として自律し、自己完結的であるという、その形式においてに評価される。だが今日なお自明とされることの多いこうした観念は、脱ハビトゥス化に芸術の「近代」を見る視点からは、逆に例えばピエール・ブルデューの『芸術の規則』がどのような前提に立ち、どのような常識と闘っていたのかを炙り出す。ブルデューは一方でハビトゥスを単なる受動的な持ち前、身につけた型としてではなく、行為者による積極的な成型行為の母胎ともなる二重性を孕んだ契機と再定義し、その一方で、芸術を「規則」=束縛からは自由な「芸術家」による独創的な創造行為と見なす、「近代主義的」な芸術観を糾弾する。ここには不思議な揺れ返しを見て取ることもできるだろう。つまり十八世紀の思索家たちによって、規則から自由な芸術観が形成されたのに対して、二十世紀末の社会学者が、今度は芸術が規則から自由ではないことを、改めて言い募った。とすれば、この両者のよじれ chiasm のあいだに閉じ込められたのが、「近代の芸術」だったらしいことになる。

可能世界論 ライプニッツ 小説家と創造、大文字の文学

以下、漠然とした予定

天野知香書評(専門学術雑誌で断られた場合、すでに出来上がりあり)
歌田書評
田中純書評
追悼 千野香織(これは 本名でゆく)
皮膚の想像力 日本語ドイツ語
カラヴァッシオ人文書院
ピエール・ブルデュー追悼
日本における美術史学の成立と展開(国立ではなくなった文化財研究所)
日文研 東アジアにおける考古学、美術史学、建築史学の成立

マッケンジー『大英帝国のオリエンタリズム』を読む

人文書院 『モダニズムの越境』

岡崎二郎 『ルネサンス 経験の条件』をいまさら『あいだ』で褒めることもないか。

福住編集長殿

きちんと目標のある連載ならよいのですが、出だしからして低調です。

読者から「もうやめろ」が来たらいつでもためますので、ご遠慮なく。

スキャンダルからはいまのところ無縁な山のなかの修道院より 稲賀繁美

□